（第３種郵便物認可）　愛　媛　新　聞　2021年（令和3年）1月16日　土曜日　地　方　（8）

日本一の紙のまち・四国中央市を舞台とする全国高校書道パフォーマンス選手権大会（書道パフォーマンス甲子園）の魅力がぎっしりと詰まった冊子が誕生した。新型コロナウイルスの影響で中止になった2020年の第13回大会の代替事業として実行委員会が手掛け、昨年末に発表した価値ある一冊だ。

同じく代替事業で全国から募った83校の作品を学校紹介とともに収録している。紙上に広がる「幻の第13回大会」。選手や冊子をデザインした高校生たちの思い、専門家や実行委事務局スタッフが気になった作品や言葉を紹介する。（雲出浩二、菅亮輔）

四国中央発

幻の書道甲子園　思い形に

第13回大会中止で冊子作成

書道パフォーマンス甲子園第13回大会の代替事業として、全国からの公募作品を集めて冊子をまとめた大会実行委員会事務局のメンバー（撮影・雲出浩二）

全国募集 83校の作品紹介

松山商業高書道部のメンバー。毎日笑いが絶えないという（「第13回全国高校書道パフォーマンス選手権大会・書道パフォーマンス甲子園」冊子から）

冊子の表紙と裏表紙のデザインとキャッチコピーは市内の高校生から募り、20年の第13回大会に向けて活動を始めていた実行委の高校生企画員による投票で決まった。表紙は三島高2年の森川実咲さん(17)、裏表紙は同じく三島高2年の岸綾夏さん(17)のデザイン。キャッチコピーは川之江高3年の浜田太陽さん(18)の作品が採用された。

PRテーマは「凜（りん）」。森川さんは大筆を握り大会の舞台に臨む選手を描いた。肩越しに視線を送り、静かに漲る闘志を示した。

張り詰めた雰囲気を出すため、紺色など寒色系の配色をベースとしつつ、赤いたすきや花でかわいらしさや華やかさも加えた。森川さんは「書道パフォーマンスの雰囲気や魅力がもっと広まればと思う」と期待した。

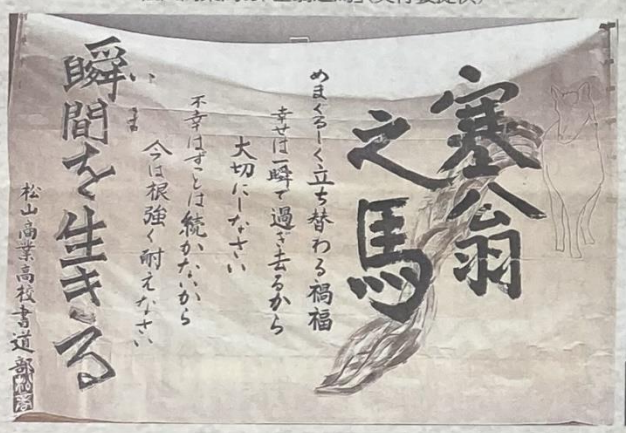
浜田さんのキャッチコピーは「影楼（かげろう）を纏（まと）い　白亜を越え　凛として華咲き誇れ」。墨で書いた文字を楼閣の影をイメージする造語「影楼」で表現し「白亜を越え」などの言葉をちりばめ、選手が白い紙の上を自在に動き、華々しく作品を仕上げていくイメージを言葉にした。

代替事業の作品公募に、愛媛勢からは8校が名乗りを上げた。「踏破～強くあったかく～」という作品を出したのは地元の三島高。書道部の前部長だった3年の森川愛梨さん(18)は「代替事業のおかげで部の絆は強まった。3年間の集大成が目に見える形で残ってうれしい」と喜ぶ。他校の作品を見て「色や書体の使い方、全体の構成など発見だらけ。刺激になった」とも。

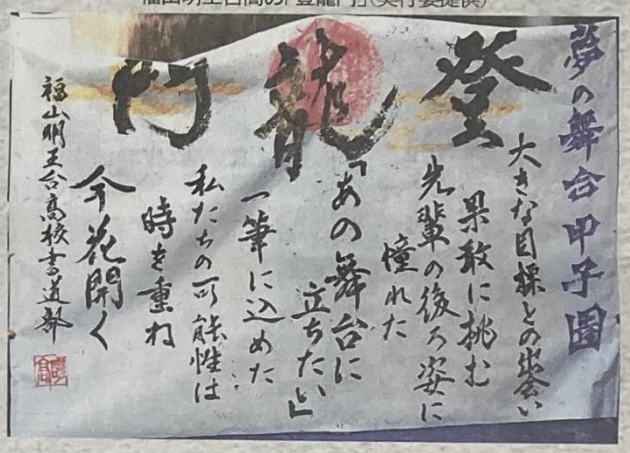
市教育委員会書道パフォーマンス甲子園振興室の職員で、冊子の編集を担当した大会事務局の井原智香さん(26)は「全国に大会を目指して頑張っている人がいることを知ってもらえるのではないか」と期待する。「冊子が書道パフォーマンス甲子園に興味を持つきっかけになればいいなと思う」と話している。

「第13回全国高校書道パフォーマンス選手権大会・書道パフォーマンス甲子園」の冊子はA4判、158㌻のフルカラー。2300部を発行し、参加校などに配布する。四国中央市の4図書館、市歴史考古博物館高原ミュージアム、郷土資料館「暁雨館」で閲覧できるほか、市教育委員会文化・スポーツ振興課内の大会実行委員会事務局で購入できる。100部限定販売で、価格は700円。問い合わせは実行委事務局＝電話0896(28)6037。土日・祝日は休業。

松山商業高の「塞翁之馬」（実行委提供）



福山明王台高の「登龍門」（実行委提供）



冊子は高校生たちの「魂の叫び」、練り上げた「言葉の宝箱」ともいえる。実行委員会事務局スタッフで代替事業に関わった市教育委員会書道パフォーマンス甲子園振興室の職員4人に、印象に残ったフレーズを聞いた。

冊子の編集担当の井原智香さんが心に残ったのは、福山明王台高（広島）の「登龍門」。本戦出場を目指す選手が、竜になりたいと急流を上るコイに自らを重ね合わせた作品だ。

―果敢に挑む先輩の後ろ姿に憧れた「あの舞台に立ちたい」

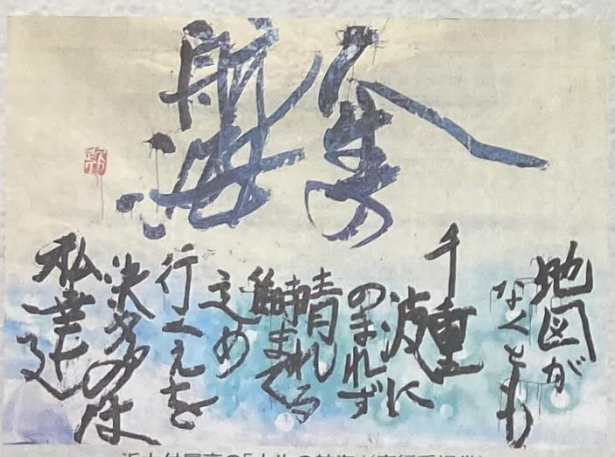
大会が中止になったからこそ出てきた言葉だろう。大会に懸ける思いがダイレクトに伝わってきた。スポットライトが当たらない選手のためにも、いい大会をつくるため一生懸命やらないといけないと改めて感じた。

19年の第12回大会から運営に携わっている立川美沙さん(20)は、前回優勝の松本蟻ケ崎高（長野）の作品をピックアップした。「僕達の青春」から「奪われた夢の舞台　期待は同情へと変わる」と記した後の言葉。

―僕等(ぼくら)は憐(あわ)れじゃない　努力の日々は無駄じゃない　悔し涙は僕等を強くした

事務局いちおし

日々を大切に思わせる　続木さん
障壁越え決意 まぶしく　守屋さん

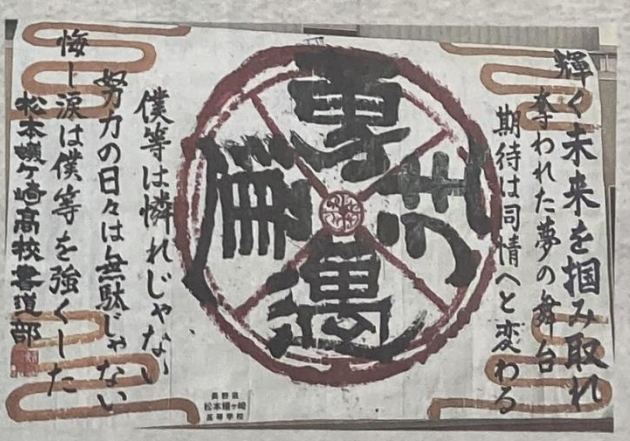


連覇への思いと大会中止の悔しさ、それでも前に向く選手の強い気持ちがよく表れている。

事務局の最年少、社会人1年目の続木果穂さん(19)が、仕事をする机の上に飾るほど魅力的と感じたのは松山商業高の「塞翁之馬」。

―幸せは一瞬で過ぎ去るから大切にしなさい　不幸はずっとは続かないから今は根強く耐えなさい

大会に懸けた思い表現　井原さん
前向く選手 気持ち強く　立川さん



松本蟻ケ崎高の「僕達の青春」（実行委提供）

近大付属高の「人生の航海」（実行委提供）

いろんなことを教わり、充実した日々を送っているが、それを当たり前と思ってはいけない。一日一日を大切に過ごしたいと思わせてくれる。

現場をまとめる書道パフォーマンス甲子園振興室長の守屋伸康さん(45)が、味わい深いと評したのは、近大付属高（大阪）の「人生の航海」。

―千重波（ちえなみ）にのまれず晴れる時まで進め行くえを決めるのは私達

次々とやってくる不安や障壁を乗り越えて、チャンスをつかもうとする高校生の決意がまぶしく感じる。高校時代は人生の選択肢の幅は広い。頑張ってほしいという気持ちになる。

いずれの参加校も勝ちにこだわらず、自分の思いを率直に出している。等身大で表現した作品が多かったように感じる。

識者講評・見どころ

県内外の書道パフォーマンスの大会で解説をした経験のある専門家に冊子の中から気になる作品を選んでもらい、講評と見どころを聞いた。

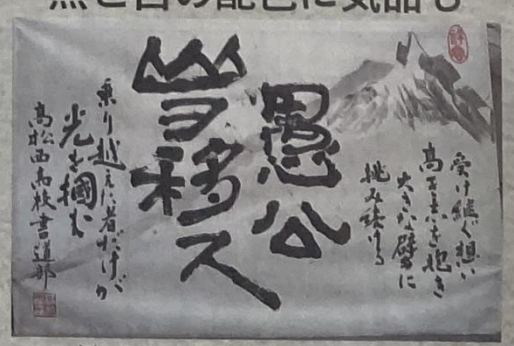
黒と白の配色に気品も

19年の第12回大会でテレビ解説をした愛媛女流書家連盟会長の藤岡抱玉さん(79)

「愚公山ヲ移ス」と記した高松西高（香川）の作品がいちおしだ。黒と白の配色が中心でシンプルではあるが、練度が高く気品もあり、引きつけられる。

メインの文字を左に据えて主張しつつ、右側に山を描く構成によって遠近感を演出している。添え書きも含め、月日をかけて古典を学びながら書の技術を磨き続けてきたのが分かるような、粘りのある線が素晴らしい。たゆまず努力を続ければやがて成し遂げられるという意味の「愚公山を移す」という言葉とテーマを象徴している。

「移ス」のスの文字で最後の線を長くするなど大胆さも兼ね備えている。音楽や踊りと合わせて実際のパフォーマンスを見てみたいと感じられる作品だった。



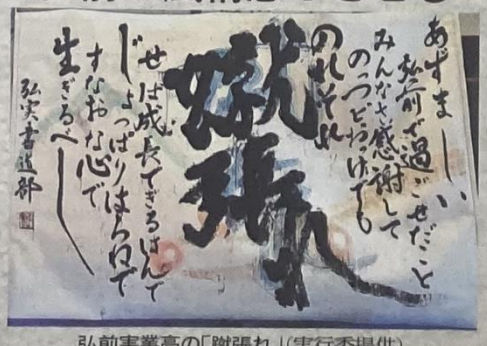
高松西高の「愚公山を移す」（実行委提供）

弘前の風情感じさせる

15、16年の大会で高松商業高（香川）を連覇に導いた元書道部顧問で香川県教育委員会職員の二宮靖之さん(45)

弘前実業高（青森）の作品は、地元の津軽弁を使ったり「弘前ねぷた」の雰囲気を取り入れたりし、地域色が伝わる。背景で郷土の山、下のほうでねぶたをイメージ。言葉が方言で統一され、生まれ育った故郷への感謝の気持ち、見る側に弘前の風情を感じさせる作品に仕上げている。

中央に大文字のオーソドックスな配置だが「頑張れ」という意味の「けっぱれ」を、新型コロナウイルスを吹き飛ばして前に進むという思いを込めて「蹴張れ」と表記している。言葉と文字が前面に出る感じが印象的だ。主に行書体を使うことで、気張らず自然体になっており、柔らかい筆遣いで流れや動きを表現できている。



弘前実業高の「蹴張れ」（実行委提供）

【紙面編集】玉井麻由